磯の浦古墳群

都市計画道路西脇山口線道路改良工事に伴う発掘調査報告書

２００３年３月

財団法人　和歌山県文化財センター

トーチカ正面（東南東から）

磯の浦古墳群出土品

例　　言

1．本書は、和歌山県和歌山市本脇に所在する磯の浦古墳群の発掘調査報告書である。

2．調査は都市計画道路西脇山口線道路改良工事に伴うもので、和歌山県の委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもとに、財団法人和歌山県文化財センターが実施した。

3．調査内容は磯の浦３号墳の発掘調査、磯の浦４号墳の確認調査および調査対象範囲における試掘調査である。

4．調査組織は下記のとおり

事務局

専務理事（事務局長兼務）　岩橋驍

事務局次長　篠原隆　　松田正昭

管理課長　西本悦子

副主査　松尾克人

調査担当部局

調査課課長　渋谷高秀

技師　丹野拓

専門調査員　齋藤有美　藤村瑞穂

5．本書の執筆・編集は丹野が担当した。

6．調査及び報告書作成にあたり、下記の方々のご教示・ご協力を得た。また、マスコミ各社、地元の方々による情報提供等を報告書に反映している。記して感謝の意を述べたい。

赤羽千代子、原利三郎、平野千里、松並真帆（関西大学）…以上調査参加者、中村識嗣（射箭頭八幡神社）、網干善教、小山仁示、米田文孝（以上関西大学）、伊藤厚史（名古屋市教育委員会）、亀ハツ子、武田光夫、田村雅弘、藤隆宏（和歌山県立文書館）、山中美千代

7．調査及び整理作業で作成した実測図・写真・台帳等の記録資料は財団法人和歌山県文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が各々保管している。

凡　　例

1．本書中の座標基準線は国土座標第Ⅵ系に基づいている。方位は基本的に座標北を用いているが、一部磁北を用いたものには図中に「M.N.」と示している。

2．土層の色調等には日本色研事業株式会社発行『新版標準土色帖』22版を使用した。

目　　次

巻頭写真

例言・凡例

目次

１．位置と環境……1

２．調査の経緯……2

３．調査内容……3

（１）試掘・確認調査……3

（２）磯の浦古墳群の調査……3

（３）第二次世界大戦末期の遺構……5

４．関連研究……7

（１）磯の浦古墳群について……7

（２）磯の浦周辺における本土決戦準備について……8

５．総括……10

写真図版

報告書抄録

1．位置と環境

調査地は、和歌山県と大阪府の府県境をなす和泉山脈の南西に位置する菖蒲山にあり[1]、紀伊水道を望む眺望抜群の地に所在する。紀ノ川下流の平野は調査地の麓で終息し、南方500mには二里ヶ浜、その西は加太の港まで磯が続く。調査地は松林の時期を経て、調査前は照葉樹の茂る里山、墓地となっていた。東西に連なる標高約50mの丘陵地であり、北と東は池に接する。南は砂地の平野であり、磯脇遺跡が所在する。

磯の浦古墳群は、和歌山市磯の浦から本脇にかけて分布しており、2号墳は菖蒲山山頂に、3号墳は東に派生した山の中腹に位置している。3号墳の東側の谷は南海道の推定通過地点であり、現在は県道粉河加太線が通る。周辺には西庄遺跡を始めとする漁労・製塩など海にかかわる生業を営んでいた人々の集落・生産遺跡が点在し、紀ノ川河口部には車駕之古址古墳や大谷古墳など朝鮮半島との繋がりを想定される古墳・遺跡が多数存在する。

また、明治時代には紀淡海峡は大阪湾の防禦の要と目されており、深山（みやま）要塞や友ヶ島要塞には多数の砲台が設置され、背後の山中には保塁が築かれた[2]。第二次世界大戦終戦直前には、連合軍の上陸が予想される地点として、多数の陣地が構築されている。

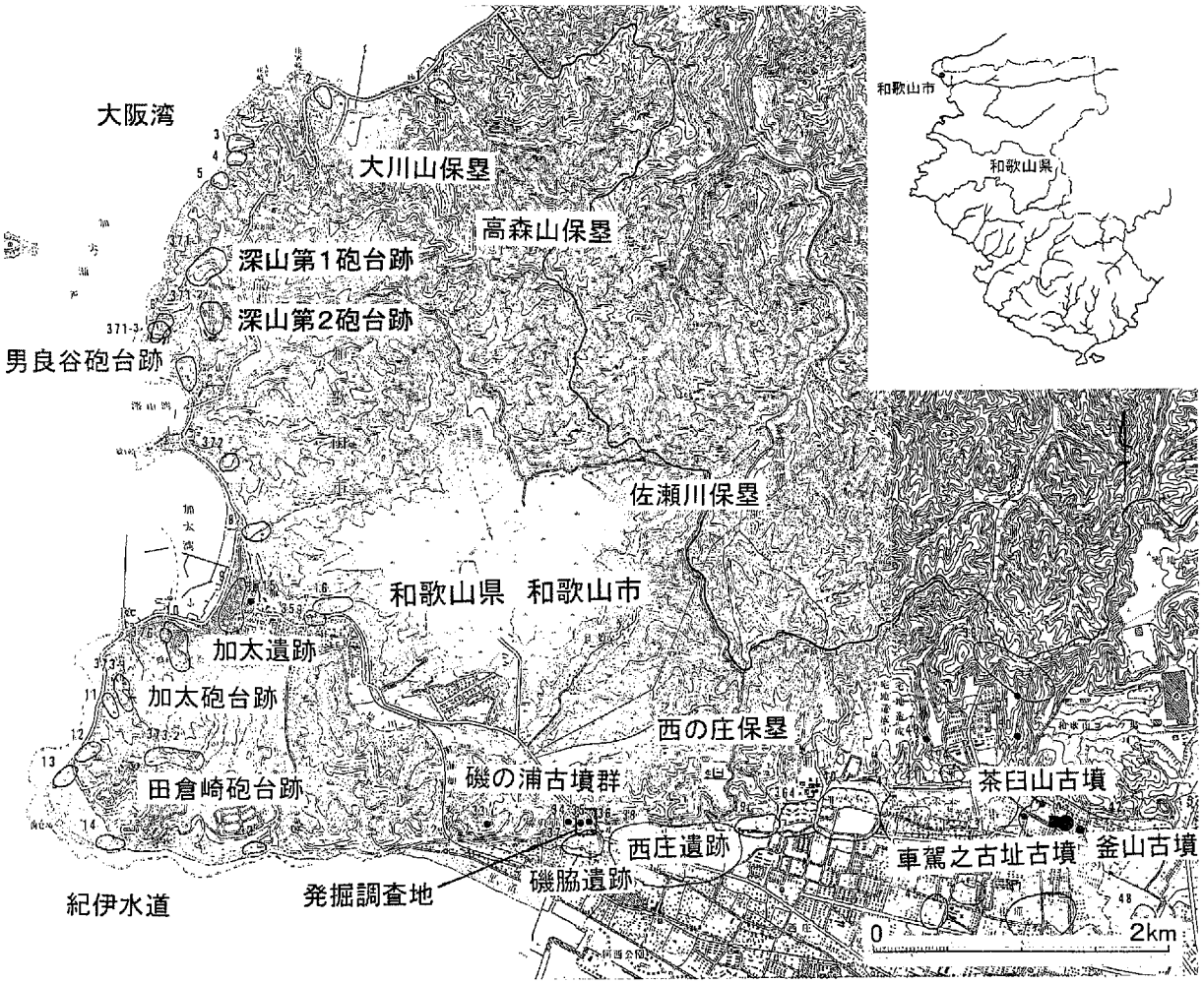


図1　調査地の位置

2．調査の経緯

平成14年６月に県道西脇山口線の道路改良工事に先立ち、磯の浦古墳群の所在する丘陵の踏査が行われた。この結果を踏まえ、現地にある墓地の移転を待って、現地調査を実施することとなった。この時点での調査対象は、磯の浦３号墳の発掘調査のほか、４号墳想定地点と菖蒲山尾根筋における遺跡の所在確認調査であった。

ところが、調査地点の確認のため、12月25日に海草振興局街路公園課と当センターで現地協議を実施した際、墓地の移転に伴い３号墳の石材の一部が搬出・粉砕されていたことと、第二次世界大戦中に作られたトーチカ（掩体）が調査区内に存在することが判明した。これらの状況を鑑み、調査開始当初から道路工事による削平の及ぶ予定範囲内の踏査・資料調査を徹底した。この結果、トーチカの裏に坑道があること、調査対象地が射箭頭（いやと）八幡神社の旧社地候補地にあたることなどが分かったため、急遽これらも考慮に入れて臨機応変に調査を行うこととした。

現地調査は平成15年１月７日から２月28日まで行い、調査後速やかに報告書を作成した。発掘調査の作業員は述べ約57人。菖蒲山東半を調査対象とし、発掘面積は197㎡である。２月22日には現地説明会を実施し、雨天にもかかわらず60名以上の参加を得た。整理作業は３月末日まで実施する予定である。

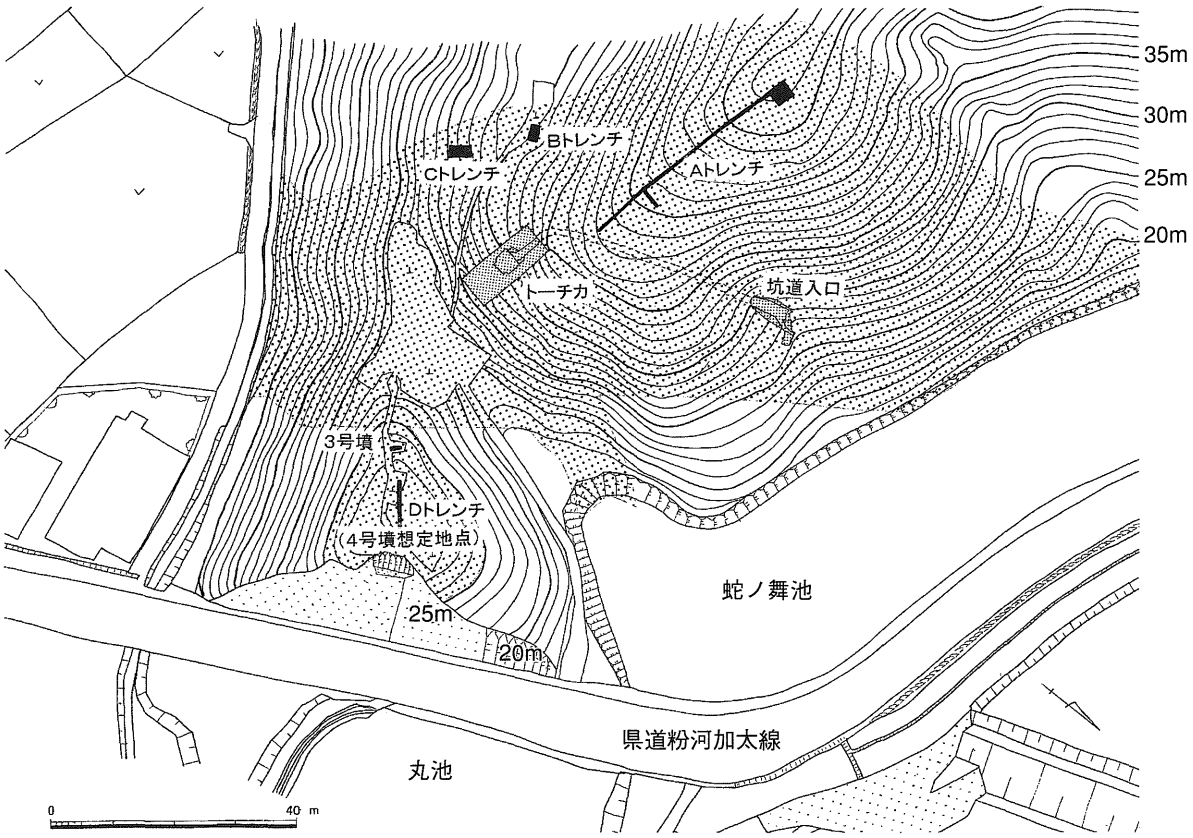


図2　調査区設定状況

3．調査内容

（1）試掘・確認調査

調査対象地内において、A～Dトレンチによる古墳の有無の確認調査を実施した。

Aトレンチは菖蒲山の山頂に近い東の尾根筋に設定した。幅0.7m、長さ40.0mで、5～10㎝掘ると地山の岩盤が路頭する。

Bトレンチは菖蒲山南斜面の平坦地に設定した。幅2.0m、長さ3.0mで、南側に堆積層が厚くなる状況がみられた。

Cトレンチは、Bトレンチ南側の石が散乱する陥没部分に設定した。幅2.1m、長さ4.0mで、表土と地山の間に礫層を確認した。B・Cトレンチから遺物は出土しなかったが、近年の堆積と考えられ、墓地ないしはトーチカ設営時の埋土と推定される。

Dトレンチは、従来4号墳の存在が想定されていた古墳状隆起の上に設定した。幅0.7m、長さ10.3mで、表土直下は岩盤、あるいは昭和の墓地跡であった。周辺の地面をピンポールで刺したところ、地山まで5㎝以上の土が堆積しているところはなく、4号墳は存在しなかったものと判断される。

（2）磯の浦古墳群の調査

磯の浦3号墳及び須恵器散布地の発掘調査を実施した。3号墳は、昭和38年に墓地へ改変されているうえ、調査直前には墓地移転に伴い重機が進入して石材が搬出されており、成果に乏しい。4号墳は前項Dトレンチの記述のとおり、確認されなかった。

このほかに、トーチカの埋土から須恵器が出土するため、トーチカ周囲の調査を実施した。

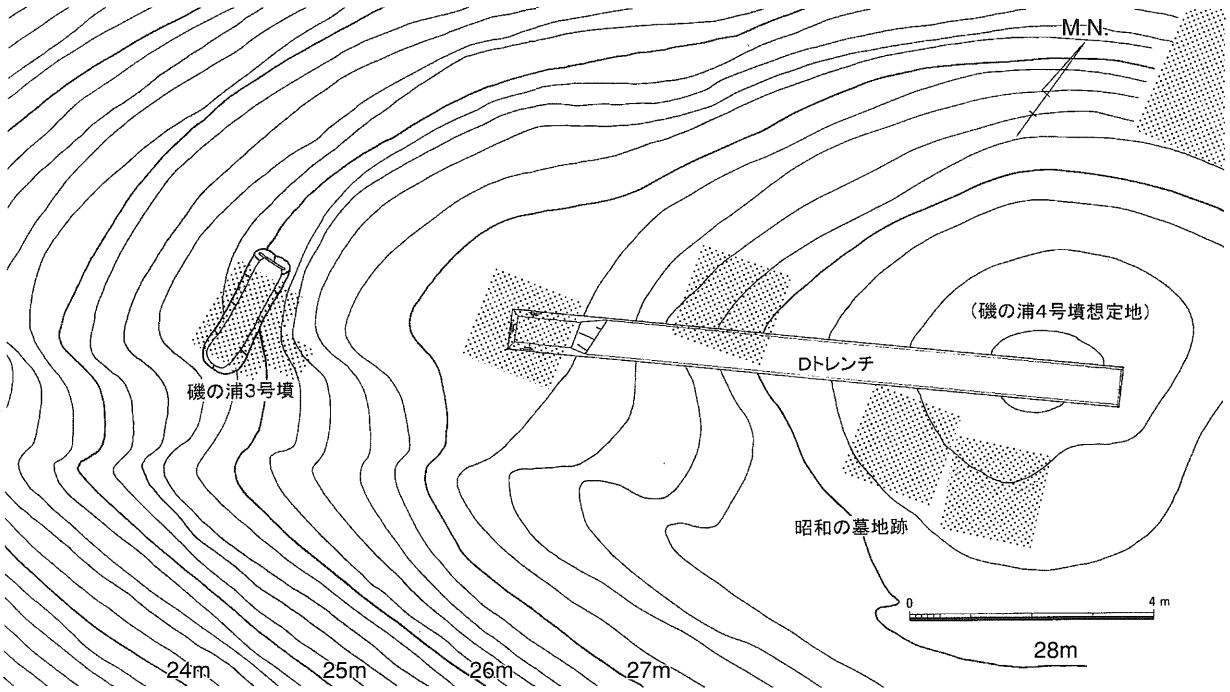


図3　磯の浦3号墳・4号墳地点

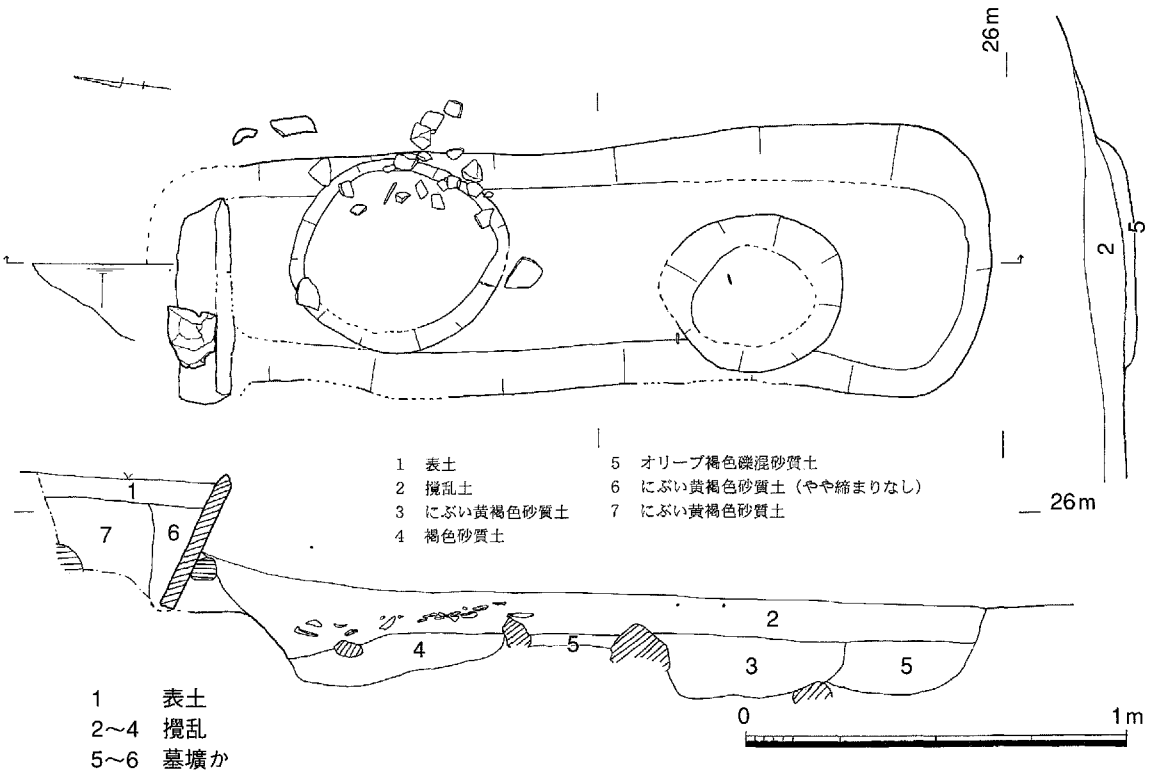


図4　磯の浦3号墳主体部

3号墳は菖蒲山の東に派生した山の中腹、標高約26mの地点に位置する。主体部周辺は墓地及び参道へ改変されており、墳丘状の高まりは確認できなかった。昭和の墓は2ヶ所の土坑に骨蔵器を埋置し、古墳の石材と考えられる板状の石を被せ、その上に墓石を置いた状態で使用されていたらしい。古墳に関わる遺構はほとんど滅失していたが、僅かに北側の小口に残る石と墓壙の下端から2.0×0.6m以下の箱式石棺あるいは竪穴式石室があったものと推定される。小口に残る石は片岩であり、高さ21cm、幅52cm、厚さは4cmが残存する。主体部の攪乱土中からは、管玉が2点出土した(図5−1·2)。管玉は径3.5mm、長さ23.5～26.5mmと細長く、類似品が西庄遺跡の竪穴住居跡から出土している。この古墳からは須恵器・直刀・勾玉が出土したことが知られており、6世紀前半に築造された古墳と考えられる。

また、3号墳から35m西にあるトーチカの埋土から須恵器の破片が多数出土した(図5−3)。出土地の内訳はトーチカ上面3点、前面13点で、一部に接合するものがあった。土は周辺に存在した古墳を削平して採取されたものとみられ、約15m³の量があるが、3号墳や4号墳　地点には土採りの痕跡はみられなかった。トーチカ周辺にも古墳に伴う遺構は残存しておらず、古墳の陥没を利用してトーチカを築造した可能性も考えられる。

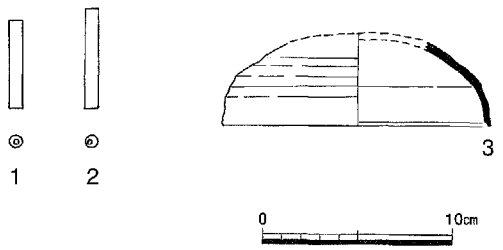


図5　出土遺物

（3）第二次世界大戦末期の遺構

トーチカは、幅3.5m、奥行き3.5m、高さ3.4mのコンクリート製の防禦陣地で、内部に銃器と人が入る空間を有する。菖蒲山の南東斜面、標高25～27mの地点にあり、東南東E→S20度の方位を向く。前面及び上面を掩蔽（えんぺい）する壁と、庇、床があり、上面には土管を利用した通気口が開けられている。前面には30×26cmの開口部があり、開口部の前に漕状の付随部が設けられている。位置と形状から、空薬莢等を廃棄するための漕ではないかと推測している。内部には床が張られており、軽機関銃を据える計画であったものと考えられる。

トーチカの射線からは、粉河加太（かだ）線方向を側射する役割を担っていたことがわかる。また、トーチカ本体には型枠として用いた板の継ぎ目痕や、コンクリートの継ぎ足し痕が残っており、100枚以上の板を組み合わせて作った型枠に、コンクリートを10回以上に渡り流し込んでいる状況がみられた。

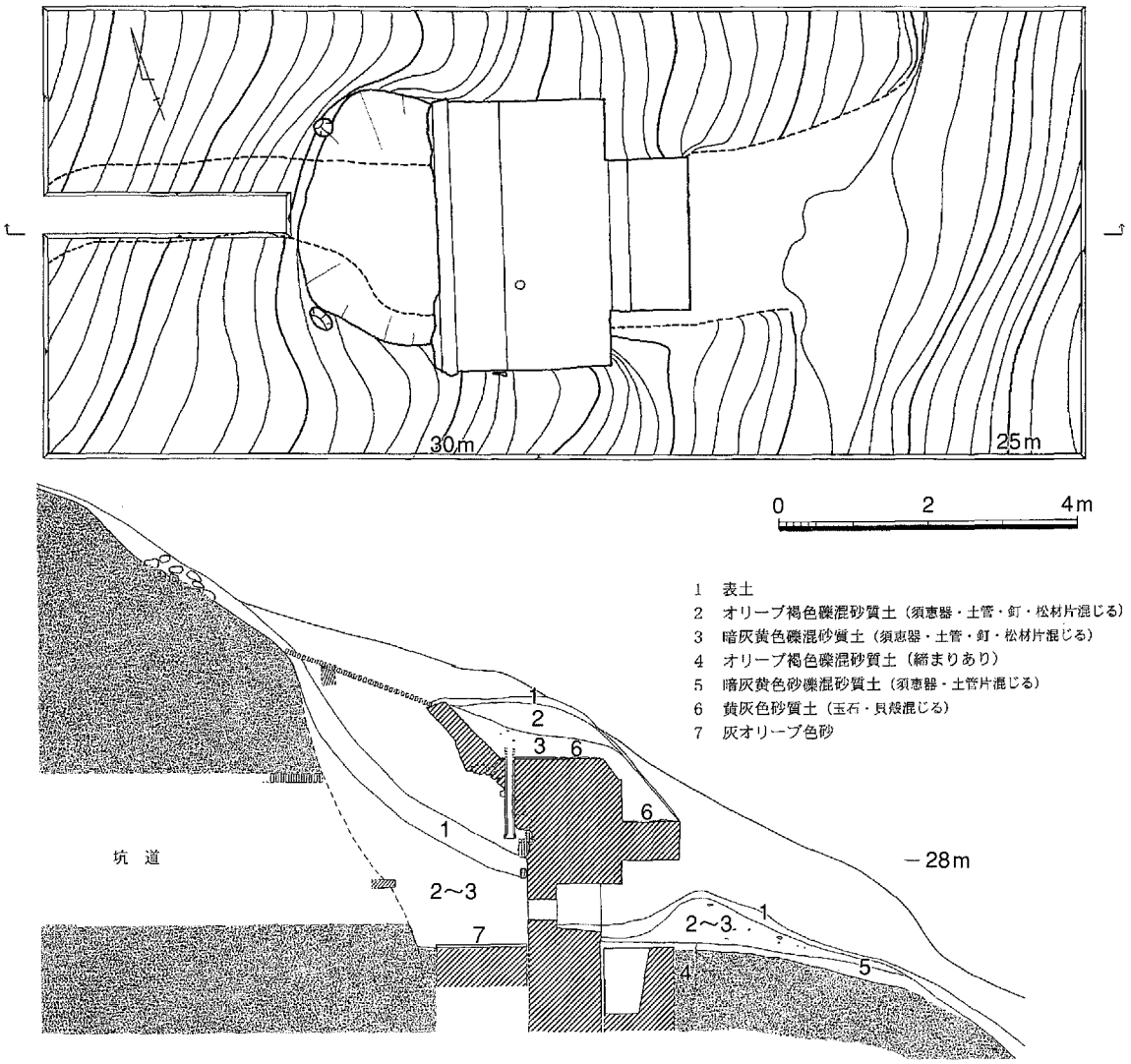


図6　トーチカ平面・断面（一部復原）

トーチカの背面には竪坑があけられており、竪坑を挟んで左右対称の位置に二本の柱穴が検出された。トーチカ上面及び内面には多量の土砂が堆積しており、この検出した２本の柱の上に板を敷き、上に土を載せた状態が復原される。柱穴の間には坑道の取り付き部分があり、地山の岩盤が崩れて埋没している。

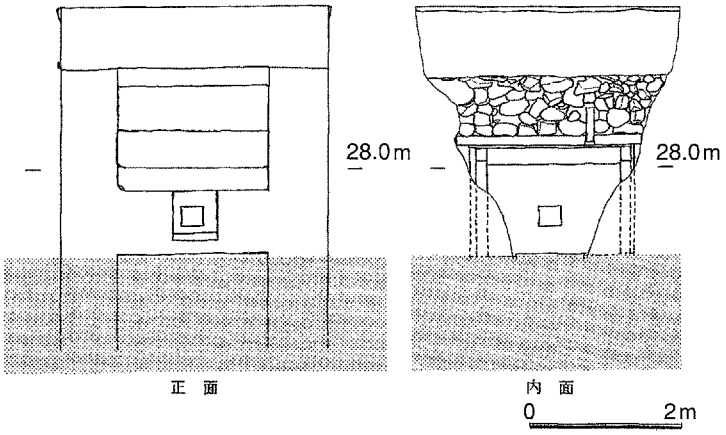


図7　トーチカの正面・内面

地面の陥没している場所を約50mたどってゆくと、北斜面に坑道の入口が開口している。入口は坑道内に比べ狭いうえ屈曲しており、爆風を坑道内に入れないための工夫とみられる。坑道は幅・高さ約２m、入口から約５mまでは天井が崩落しており、方形の穴が２箇所検出された。

トーチカ及び坑道からは釘、鎹（かすがい）のほか、ガラス、ゴム、木材片が出土している。

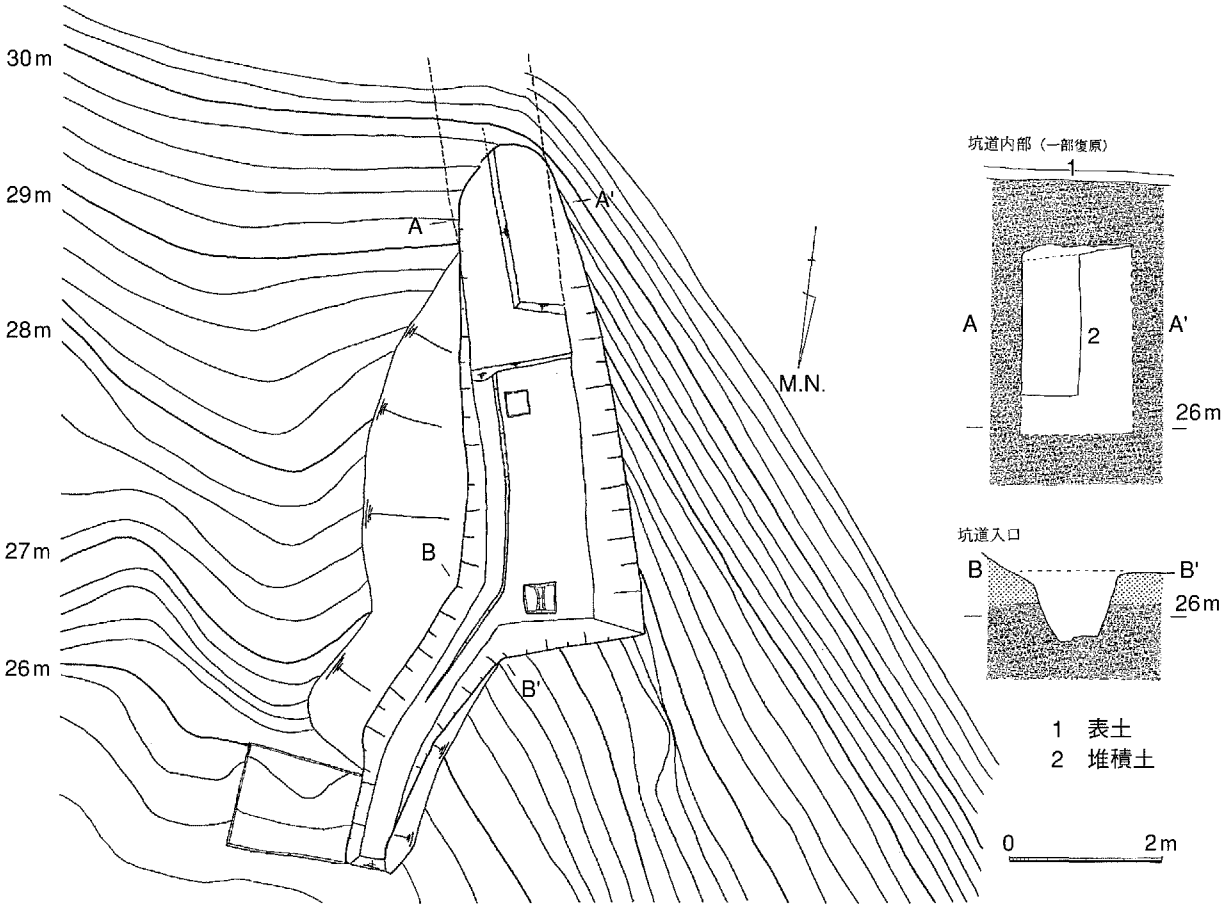


図8　坑道入口

4．関連研究

（1）磯の浦古墳群について

磯の浦古墳群は『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図平成７年度』によると、１～４号墳は一様に、円墳で土師器が出土したという記載になっているが、実態は異なっている。土師器が出土したという記録はなく、土師質の蔵骨器の破片が出土しているので、これを土師器と誤認しているのではないかと推定される。１号墳は２・３号墳より約500m西の山頂にあり、標高は88m、詳細については不明である。１号墳と２・３号墳はかなり離れており、西庄古墳群を含めて３つの支群と考えたほうが適切ではなかろうか。

磯の浦古墳群を墓域とした集団の集落については、磯脇遺跡と西庄遺跡が候補としてあげられる。磯脇遺跡は西庄遺跡と谷状地形を挟んだ遺物散布地であるが、遺跡の内容が把握されていない。西庄遺跡は５世紀代を中心に漁業・製塩活動が盛んに行われた遺跡であり、現在までに横穴式石室３基、竪穴式石室１基を含む６基の古墳の存在が確認されている。古墳の年代は５世紀中頃の古墳が１基あり、残りは６世紀後半の古墳であるらしい。磯の浦３号墳・散布地遺物の年代は西庄遺跡で古墳が確認されていない時期にあたり、調査成果の増加を待って墓域の移動等について検討が必要であるといえよう。

今回の調査では、磯の浦３号墳が所在する支群について、基礎資料を整え考察を加えることとする。

磯の浦２号墳は墳丘の形状がやや明確ではないが、径約10mの円墳と考えられる。墳頂には２×４mの窪みがあり、主体部は西北西の方位を向く。墳頂には墓の台石があり、一説には中村忠政の墓があったという。盗掘を受けたらしく、付近には礫が散布している。

磯の浦３号墳は箱式石棺あるいは竪穴式石室を主体部とする古墳で、今回の調査で管玉が２点出土した。主体部は昭和38年１月に墓地へと改変されており、改変時に出土した遺物は発見者２名により分有されていたが、現在では古墳から約200m南方にある射箭頭八幡神社に所蔵されている。図９の４・５は須

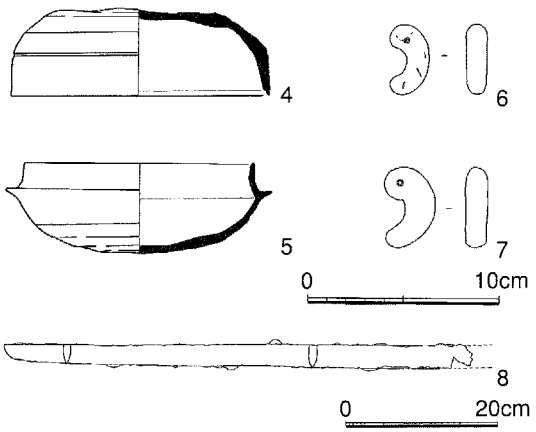


図9　伝・磯の浦3号墳出土資料

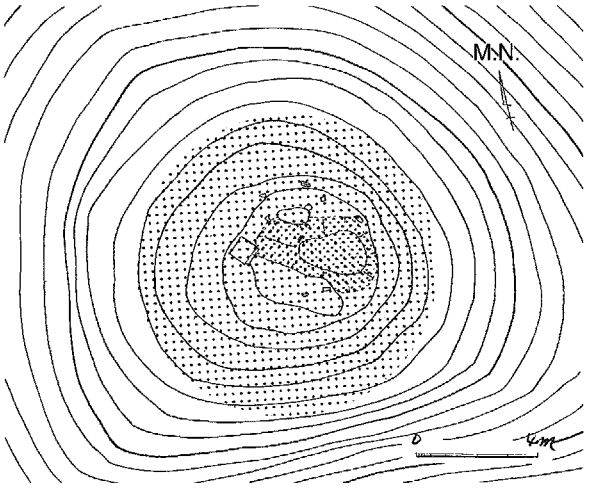


図10　磯の浦2号墳 墳丘

恵器の蓋坏である。坏蓋は口径13.6cm、坏身は口径12.2cm。６・７は瑪瑙製の勾玉である。７は研磨・穿孔が不自然であるが、箱書きとおり昭和38年出土品とすると、出土後に研磨したものと考えられる。９は鉄刀である。接合する長さは61cmであるが、破片を考慮すると80cm以上になるものと推定される。

磯の浦４号墳は立地としては３号墳より良好な位置をしめており、県道粉河加太線の建設に伴いカットされた地点に存在した可能性はあるが、現在は存在を確認できなかった。

他に古墳の想定される地点として、須恵器散布地がある。付近をピンポールで突いて地表下の状況を把握するべく努め、可能性のある地点にＢ・Ｃトレンチをあけたが、古墳は確認されなかった。古墳の主体部の陥没を利用して軍用の収蔵庫・弾薬庫を造ろうとした例[3]もあり、トーチカの建造された地点に古墳が存在した可能性も考えられる。

（２）磯の浦周辺における本土決戦準備について

サイパン島、硫黄島、沖縄戦へと戦局が悪化してくる中で、連合軍が大規模に本州分断作戦を実施する場合、京阪神と名古屋の攻略が企図されるものと考えられた。和歌山県においても、護阪部隊と呼ばれた第144師団が連合軍の上陸が予測される地点を重点的に陣地構築を急ぐようになった。昭和20年４月に「決号作戦準備要綱」が発令され、磯の浦周辺にも陣地が構築された[4]。

紀ノ川北岸では二里ヶ浜への連合軍の上陸が想定されており、これに対する艦船砲撃の役割を担った陣地が①の重砲陣地であった[5]。昭和20年２月11日に通称中部第75部隊が陣地構築を開始し、終戦までに約90％完成したらしい。この部隊は口径15cmのカノン砲二個中隊編成であり、①の山塊南山麓には６～８ｍの平坦地が２ヶ所造成されている。平坦地の周囲は２ｍから７・８ｍある切り立った崖となっており、前方も1.5ｍほどの土手となり、山麓からの入口は屈折している。背後の崖面は土砂で埋没しているが、おそらくカノン砲を収納するための壕が掘られていたものと推定される。

重砲陣地を防禦するため、重砲兵中隊が菖蒲山を含む磯の浦の山塊に陣地構築を行い、144師団の歩兵415連隊第１大隊が調査地北東の通称陣台山（現在のつつじが丘付近）から前山にかけての陣地構築を担任した。

重砲陣地①を防禦するものとして、②の重機関銃陣地、③の野砲陣地、④の曲射砲陣地が構築されている。現地を踏査していないので位置や射線方向を確認していないが、②は重砲陣地方向への背面砲撃を、③は菖蒲山の北方あるいは南方を侵攻する戦車への攻撃を、④は現在南海加太線の通る谷方向への砲撃を意図したものと考えられる。今回調査したトーチカを含む本脇所在のトーチカ群は、その構造から軽機関銃を据えることのできる施設と位置付けられる。銃眼の向きから、①～④を補完し、主に粉河加太線から重砲陣地へと侵攻する兵士を狙撃するものと考えられる。また、二里ヶ浜の砂堆上には水際陣地としてトーチカが造られており、砂堆を切って北上

する道路沿いに近年までコンクリート製のトーチカが残存し狸の棲家となっていたらしい[6]。

本脇（旧西脇野村）所在のトーチカ築造時の状況は、７月９日の和歌山大空襲後、実際に現地で作業に携わった女学生の方々[7]の記憶をもとに再現すると次のようであったと言う。まず朝は８時に二里ヶ浜駅前の学校へ集合し、兵士と合わせて４名程度の班を編成して連日異なる陣地を構築にゆく。兵士がダイナマイトで発破をかけ、ツルハシ、スコップで土をほり、それを女学生がもっこで運び出す。ちなみに今回の調査現場の坑道を掘った土は、トーチカ側から運び出して、西側の谷へ捨てたらしいので、トーチカの南側に伸びる道はこのときの作業道であろう。坑道を掘ると松の板を組み、釘・鋲を用いて固定したものとみられる。そして坑道の入口にはアオキを植えたりして、目立たないようにしていたという。今回調査を実施した坑道においても、柱を建て、板天井を張り、土を被せて、坑道入口をカムフラージュしたのではないかと推測される。作業は終戦の日まで続き、今回調査したトーチカのみが完成、そのほかの地点は50～90％の完成度であったらしい。

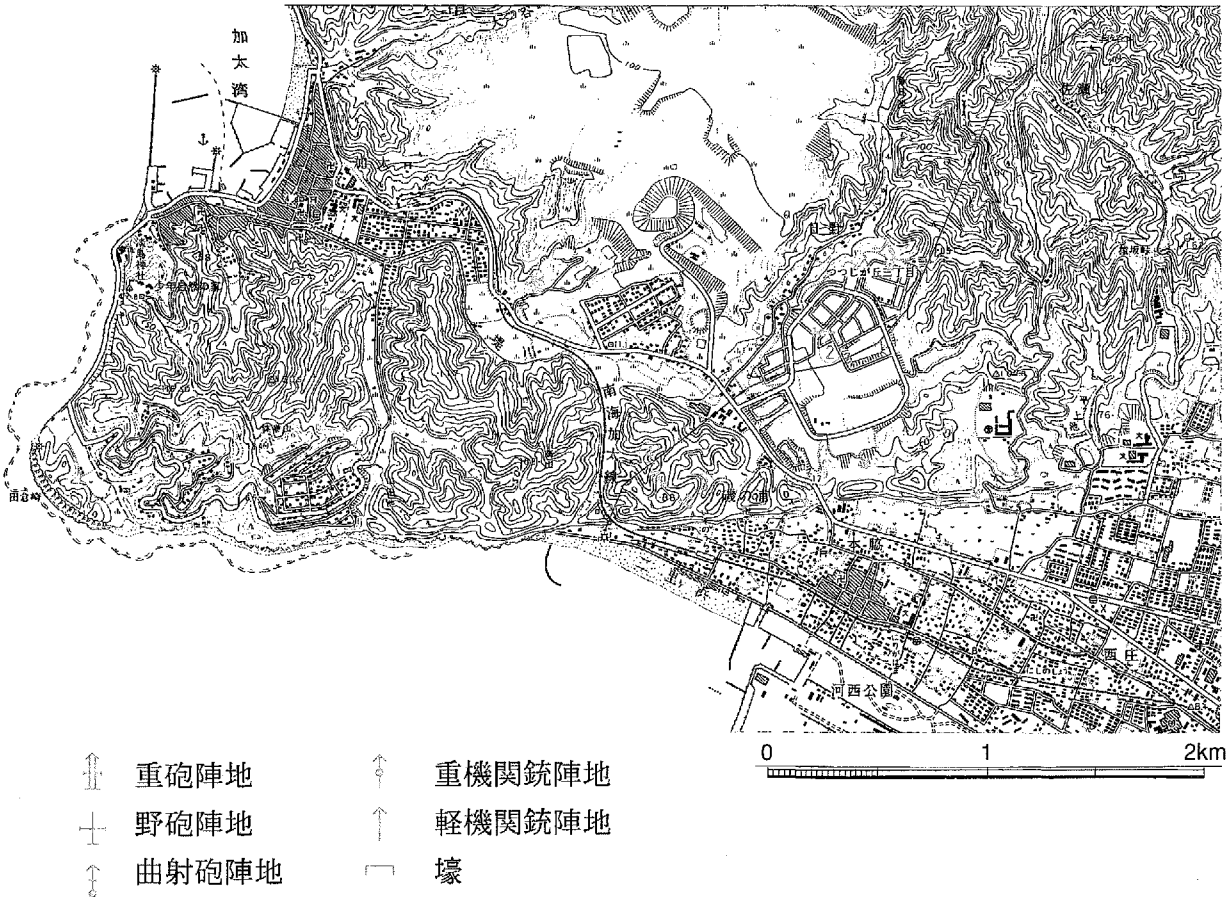


図11　磯の浦周辺の本土決戦準備

5．総括

今回の調査では、調査前の計画とは全く異なる対象物について、臨機応変に日程を振り分け調査を実施した。磯の浦３号墳は壊滅的状況であり、４号墳は存在せず、第二次大戦中の遺構に伴い須恵器が散布するという予想外の展開であったが、残存する断片的なデータ・資料から磯の浦古墳群の一端を復原できたことは成果といえよう。

トーチカ・坑道の調査についてはテレビ・新聞等のマスメディアを通じて情報を発信し、また現地説明会や地元での聞きこみにより短期間での情報収集に努めた。結論として、調査を実施したトーチカは重砲陣地の防禦を補完するための軽機関銃陣地であるものと判断した。調査・整理期間が短期であったこともあり、調査・報告に至らない点もあるとは思うが諒とされたい。

註

1　菖蒲山は古代より墓所山であり永々支配すべき土地であるとして、慶長６年９月に浅野幸長から射箭頭八幡神社へ覚書が下されている。現在、通称として、神主山・宮山とも呼ばれている。

2　図１の遺跡名は『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図平成７年度』1996　和歌山県教育委員会、近現代の遺跡等は浄法寺朝美『日本築城史』1971による。

3　『豊橋市石巻本町　宮西古墳』1980　愛知県立時習館高等学校歴史同好会、『愛知県重要遺跡指定促進調査報告Ⅵ』1981　愛知県教育委員会を参照。

4　『和歌山市史第３巻近現代』1990　和歌山市史編纂委員会、『戦史叢書　本土決戦準備＜２＞―九州の防衛―』1972　防衛庁防衛研究所戦史室　東雲新聞社、川合功一『太平洋戦争と和歌山県』東京経済新聞社を参照。

5　「附図第六　和歌山北方地区陣地詳細図」本土全般99『本土決戦関係資料（附図）』を参照。なお、磯の浦周辺の陣地構築については、伊藤厚史氏と一部の踏査を行いご教示を得た。

6　田村雅弘氏等のご教示による。

7　亀ハツ子氏、山中美千代氏のご教示による。

調査区遠景（東から）

調査区遠景（北から）

Aトレンチ（西から）

Bトレンチ（西から）

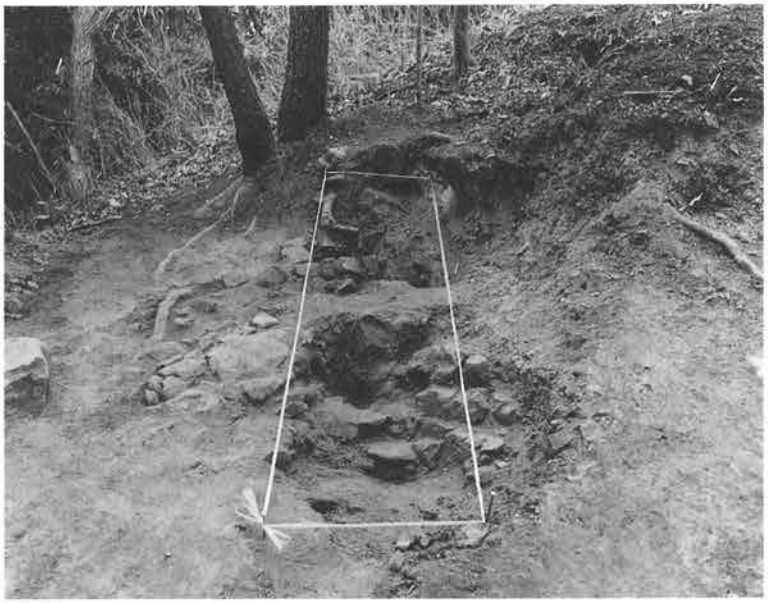
Cトレンチ（南から）

Dトレンチ（4号墳想定地）
（西から）

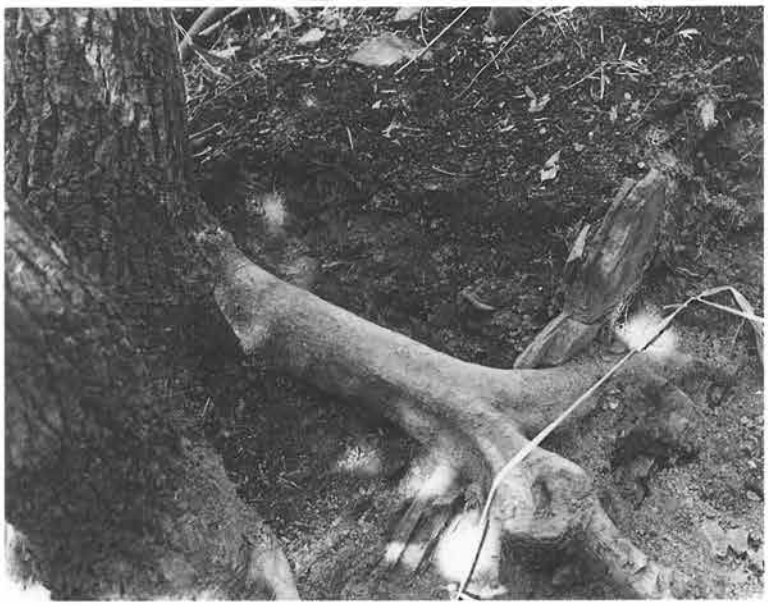
2号墳（東から）

3号墳遠景（西から）

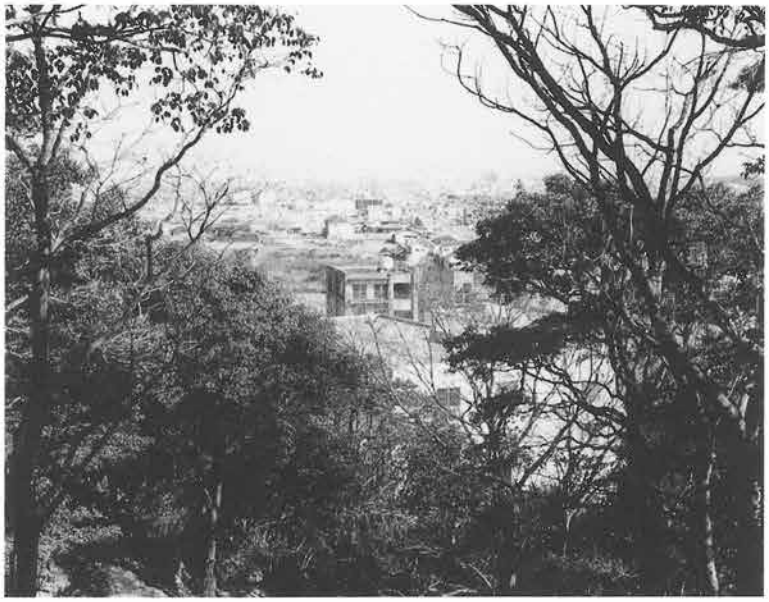
3号墳完掘状況（南から）



3号墳主体部復原状況（南から）



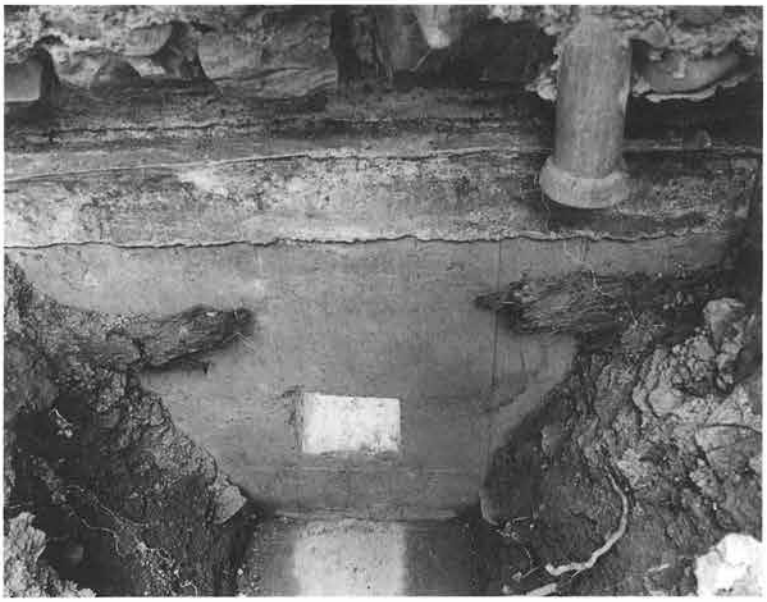
3号墳北側土層断面（西から）



トーチカ射線方向の眺望
（西北西から）

トーチカ（東南東から）

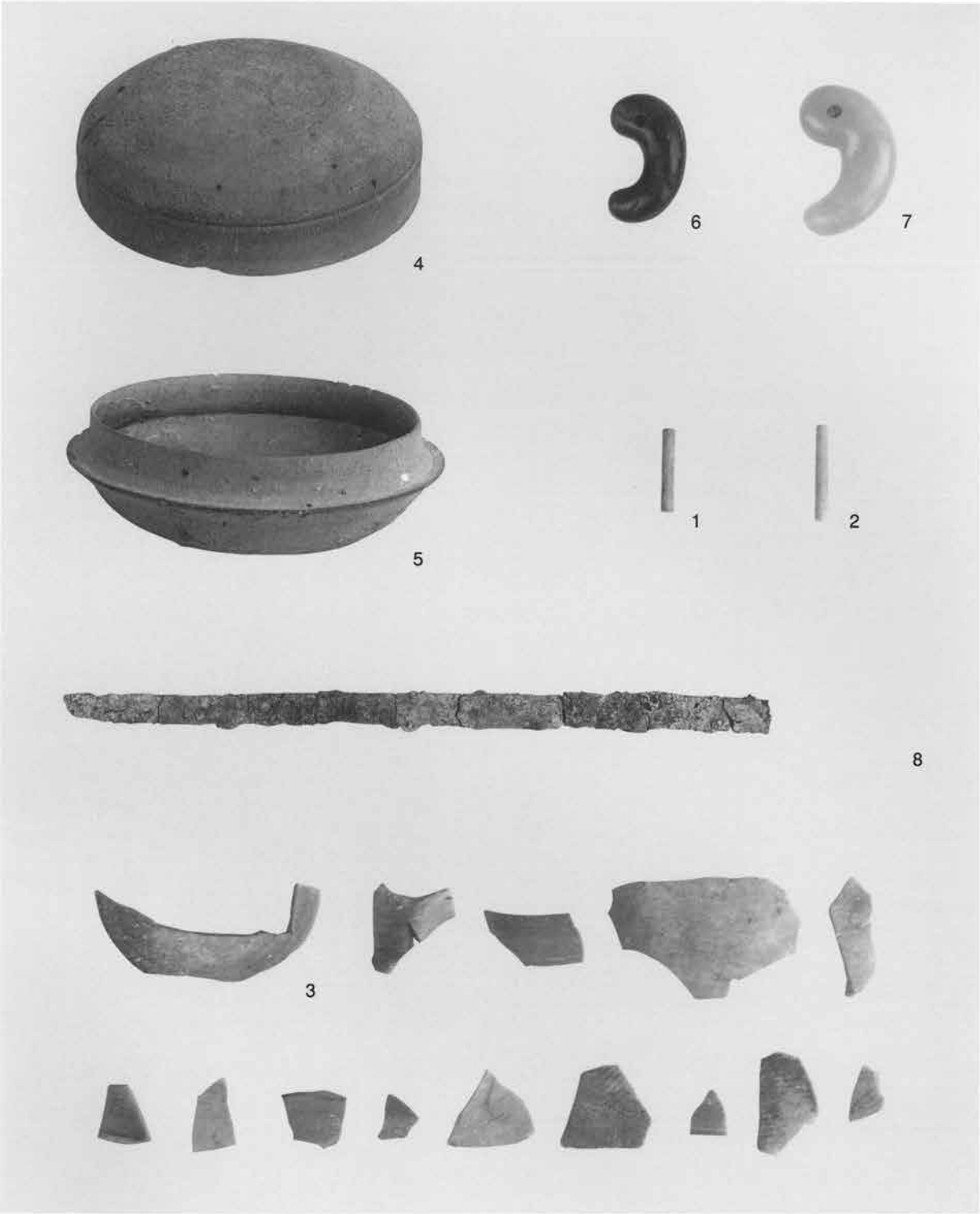
トーチカ（南東から）



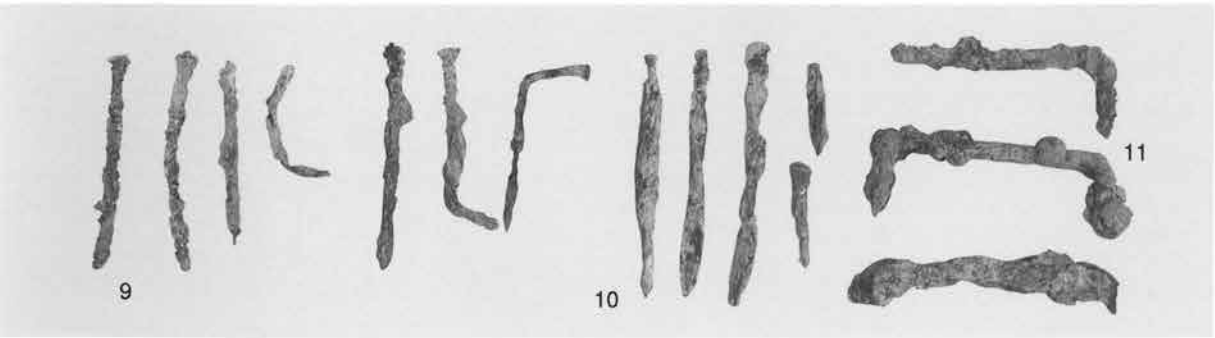
トーチカ内部

坑道入口（北から）

坑道内部



磯の浦古墳群出土品（伝世品含む）



トーチカ・坑道出土品

報 告 書 抄 録

ふりがな	いそのうらこふんぐん
書名	磯の浦古墳群
編著者名	丹野　拓
副書名	**都市計画道路西脇山口線道路改良工事に伴う発掘調査報告書**
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集機関	財団法人　和歌山県文化財センター
所在地	〒640−8268　和歌山県和歌山市広道20番地　TEL.073−433−3843
発行年月日	西暦2003年３月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	調査期間	調査面積	調査範囲
いそうらごうふん 磯の浦３号墳 いそうらごうふん 磯の浦４号墳	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 もとわき 本脇	3020150	035 036	34度15分42秒 東経 135度6分10秒	20030107 ～ 20030228	197m^2	**都市計画道路西脇山口線道路改良工事に伴う調査**

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
磯の浦３号墳 磯の浦４号墳	古墳 散布地	古墳時代	古墳1基	須恵器･管玉	第2次世界大戦時のトーチカを併せて所収

磯の浦古墳群

都市計画道路西脇山口線道路改良工事に伴う発掘調査報告書

2003年3月25日

編集
発行　財団法人　和歌山県文化財センター

印刷
製本　清水印刷株式会社